

## 「チャットルーム」の可能性

オリガ タラリキナ

### はじめに

会話教育（とはいっても、概して、話し言葉での会話だが）は、初修外国語教育においてもっとも難しい課題の一つである。「チャットルーム」のクラスは、会話の学習において教員とその学生を手助けしてくれる役割を担う。ここでは、チャットルームにはどのような目的と可能性があり、特に、チャットルームを担当する教員がどのような問題に直面し、それをどう解決するか、そして、いかに教育が行われるかを検討したい。

このエッセイでは、《可能性》（学生がどのような結果に到達するかという可能性）と《目的》（教員と学生の協働を条件とする結果）の概念は一致している。では、チャットルームに参加することで、我々はどのような《結果》を得たいと考えているのだろうか。

### 会話教育

チャットルーム——これは授業ではない。ネイティヴ・スピーカーと交流しながら、会話のための自然な環境を再現しようという会話クラブ〔サロン〕である。会話学習に重点を置きながらも、打ち解けた雰囲気の中で行われている。

会話は、言語活動の一種として、その要素（パラメーター）の大半の特徴を持つ。そのうちもっとも重要なものは、以下の通りである。

#### ◆動機：情報を伝え、自分の意見を述べる必要性や需要

私は自分のクラスでは、学生にとって身近なテーマを用いる。それ以外にも、発話を動機づけるべく、学生たちの意見と一致しない見解をあえて議論の中に含めることにしている。

#### ◆目的と機能：相手にはたらきかける力、自己表現の能力

#### ◆手段：語学・発話のための教材

チャットルームには様々なレベルの学生がや

って来る。会話を続けたり、質問に答えたりするためには必要な単語の意味が掴めない者も時々いる。なので、学生が予め準備できるように、私はチャットルームの全体テーマを事前に伝える。また、当該言語の運用能力が高くない学生がいる場合には、課されたテーマによせてテクストを書く。あるいは、学生が準備されたテクストなしでもこなせると考える場合には、新出単語と辞書にある説明を書き出すにとどめる。

#### ◆アウトプット：多人数による会話、モノローグ的な発話などの会話のタイプ

テーマ次第で生み出される会話も変わる。例えば、見解の対立が生じた時、学生は《説得型》の会話に加わるが、学生と教員の意見が食い違うと、そうした会話は時に《論争型》に発展し得る。通常は、教員が学生に意見の対比を示しながら、意図的にそうした会話をリードする。学生が何かを知る必要が生じたり、授業のテーマについて情報を提示する必要に迫られたりした場合、学生は《情報探求型》の会話に参加する。教員の質問に答えるために、学生たちが共通見解に達する必要がある場合には、時々、《審議型》の会話が生じることもある。

#### ◆テクストや印刷された予習教材がある場合、もしくは、ない場合

授業の始めには、学生が自宅で準備学習をしてきた教材を使う（もちろん、学生が予習をしてくれれば、である）。それから、あるテーマに沿った討議を行い、学生が質問し、それに対して答える。つまり、その先の学習課題は、予習のない、自然発生的なものである。こうした能力を育むことこそが、チャットルームの目的である。

#### ◆メカニズム：内在的、対外的にも意味を成すような、会話の上での相互関係を、口頭で構築することを可能にする能力の複合

ここで注意を向けるに値するのが、《ことば

を話す能力》と《コミュニケーションの能力》の区別である。

《ことばを話す能力》とは、最適なパラメーターに沿って実現できる、言語運用能力である。こうしたパラメーターとは、無意識性、完全な反射性、言語規範の一貫性、話すにあたっての標準的なテンポ(スピード)、安定性——つまり、変化する条件に際しても変わらないこと——である。もしもこうしたパラメーターに沿った話し言葉の運用が我々を満足させるなら、それはすなわち、学生がそれを正しく行っているということで、《ことばを話す能力》が養成されたということができる。

対して、《コミュニケーションの能力》というものは、話す活動のことで、これも最適パラメーターに沿って可能になる。《ことばを話す能力》を形成することは、学生が正しく発話できるように、それを保障することを意味する。しかし、価値ある交流のためには、第一に、学生が自分の意見、企図、印象を独力で表現するために、《ことばを話す能力》を使うことができる必要がある。そうでない場合には、言語活動は閉じられた部分で形成されたに過ぎず、その実現は限られたものである。第二に、どのような目的のために、いかなる状況で、交流がどのような相手との間で行われるかによって、自由に、そしておそらくは意識的に、話し言葉の運用(能力)の選択と組み合わせを変化させることが必要である。人がこれらをすべてできるようなら、その人には《話す(コミュニケーションの)能力》が備わっているといえる。こうした能力を持つということは、話し言葉のスタイルを正しく選ぶことができ、交流のテーマに応じて発話の形式をコントロールでき、(その場の目的と条件に合わせて)もっとも効果的な、言語の(そして非言語的な)手段を使うことができる、ということを意味する。

《ことばを話す能力》は、もともと、ステレオタイプ的で機械的なものである。対して、《コミュニケーションの能力》は、創造的な性質を持っている。というのも、交流の条件というものはまったく同じものが繰り返されることがないからで、毎回、人は、必要な言語手段と技

能を新たに選び出さなくてはならない。それはつまり、《コミュニケーションの能力》の教育方法は、《ことばを話す能力》の教育方法とは異なっているべきだということである。

さて、この2つの用語に注意を払いつつ、チャットルームでの会話学習に話を移そう。無意識的行為が能力として定着するように、私は学生に、間違いを犯した文章を、話の自然なテンポを保ったまま、無意識の域に近く、バリエーションを付けられるようになるまで、もう一度、二度と繰り返すよう求める。それ以外にも、授業の中で特定のテーマで立ち止まることもある。それは、一度の授業内で、ある表現や文法構文を数度にわたって使うことを可能にし、また、学生の再現能力を高める作用も持つ。

《コミュニケーションの能力》を高めるために、授業ではテーマとつながりのあるシチュエーションで会話をする。しばしば、授業のテーマは、学生の経験と結びついた〔外国語教授法でいうところの〕言語学的地域研究のようなものになる。そうした時には、あるシチュエーションを思い出したり、新しい状況を作り出したりして、あれこれのシチュエーションで使われるフレーズ、表現、対話を練習する。例えば、ある学生が以前ロシアに行ったことがあるとする。彼女はロシアの人々に対して何を思ったか?それはどのようなシチュエーションだったか?そのシチュエーションで彼女は何を言ったか?といった具合である。

### 言語のハードル

チャットルームの教員は教師としては位置づけられておらず、[ロシア語の場合は]ロシア語で交流ができ、ロシア文化について何かしら知っている、あるいは、ロシアにつながりのあるあらゆるテーマについて興味をそそるような問題を提起できるネイティヴ・スピーカーとして位置付けられている。かくして、授業では、フレンドリーで親密な雰囲気が出来上がっている。これは、言語のハードル、話すことに対する恐怖を克服する方法の一つである。

言語のハードルとは、話し相手が学生の言うことを理解してくれないのでないかという恐

怖、反対に、学生が話し手の言ふことが分からぬのではないかという恐怖から生じ得る。ロシア語での体系立った通常授業以外に、この問題は、話をする経験の蓄積によっても解決できる。話をする経験とは、(学生がその大部分をロシア語の授業で習得する)言語を実際に駆使することや、ネイティヴ・スピーカーとの直接の交流で得られる、その言語に対する経験的な観察を含む。学生がチャットルームに来れば来るほど、このネイティヴ・スピーカーと多く交流することとなり、当該言語にさらに多く触れることになる。

授業の始めには、学生を会話に引き入れ、母語をロシア語に切り替えさせなくてはならない。そのために、簡単な質問から授業を始め、それらを徐々に複雑にするようにしている。例えば、「元気?」「休日には何をしていたの?」

あるいは、「今日は何時に起きたの?」といったような、学生を特定の方向に向けるもう少し具体的な質問。一部の学生たちにとって、こうした質問やそれに対する答えは、文法的に難しく感じられ、間違いもするが、私はここにささやかな意味を見出している。授業のこの段階では、自分の考えが伝わるように表現すること、ロシア語に切り替えることが重要だからだ。もしも学生の答えがまったく意味をなさないものであつたら、間違いを強調することなく、学生が正しく使えなかった文章を彼/彼女の後に繰り返すことで、ソフトに訂正することができる。

「私は音楽は好きです。(я люблю музыку)  
「そうなの!あなたは音楽を好きだということね。(Значит ты любишь музыку!)」  
といったように。

徐々に、学生は教員と教員が話すテンポに慣れてきて、ロシア語に切り替えができるようになり、より自由に話せるようになってくる。

その他に、授業のテーマは学生たちの関心と要求に応じて提案されている。もしもテーマが関心に近いものであれば、学生は話したがる。あるいは、学生の考え方や意見と一致しない見解や事実を、教員から学生に提示する。この場合、反対の立場にいる教員を説得することが求められるわけだが、これもまた、ロシア語で話

す恐怖という問題を解決するにあたって効果がある。

### 文化研究的な方針

言語のハードルは、学生のコミュニケーション・プロセスにおいて克服しなければならない唯一の障害というわけではない。文化的なハードルもまた、学生とネイティヴ・スピーカーの交流を困難にする。常に言語教育において主要な困難となるのは、異文化理解である。そのため、チャットルームでは、異なる文化の特徴についての説明に重きを置いている。地域研究は、参加者のロシアへの、そしてロシアの文化や伝統への関心を高める補助的手段であり、同時に、ロシア語を学びながら文化間のハードルを乗り越えることに資するものもある。

最低限、次のようなものが、ナショナルに特徴的な色彩をもたらす文化の構成要素に分類され得る。

- a) 伝統 (あるいは文化の基盤となる要素)、そのほか、文化の《社会的規範》領域において伝統として判断される行事・儀礼 (ある規範的要 求システムにおいて、しかるべき方向に人々を無意識のうちに参加させる機能を果たす)
- b) 日常化した文化 (伝統と密接に結びつき、その結果、しばしば伝統的日常的な文化と呼ばれるもの)
- c) 日常的な慣習 (交流規範の社会知において受け入れられた、その文化を表現する習慣)
- d) [ある文化的・言語的集団が]自らを取り巻く世界をどう感じ取るかという特徴を映した《ナショナルな世界観 (национальная картина мира)》<sup>2</sup>、それぞれの文化を表象した思想のナショナルな特徴
- e) 民族の文化・伝統を反映する芸術文化

地域研究的な教材は、交流の様々な局面でコミュニケーション能力を伸ばすこと可能にす

る。相手の国に関する多種多様な情報を得ることは、私たちを取り巻く現実を正確に認識することに役立つ。教員は、ロシアの豊かな文化的伝統について語り、新年のお祝いや、バスハや、国際女性デー等の伝統について話す。こうして徐々に、ロシアのイメージが生成され、同時に、ロシアの人々が持つ価値観に関する理解も進む。

そこで私はいつも、日本人の中にあるロシア人に関するステレオタイプというテーマに必ず触れる。これは、ロシアの人々の様々な生活の場面に関わるとても広いテーマである。私が、何が本当で何がそうでないかを説明すると、そこからあれやこれやのステレオタイプが現れる。もちろん、反対に、ロシア人の間にある日本人に関するステレオタイプについて私が話し、質問し、何が真実と一致していく、何が誇張されたもので、あるいはまったく事実ではないのかを確かめることもある。こうすると学生は、単に情報を受け取るだけでなく、会話に参加する必要に迫られる。

私たちが気に入っているもう一つのテーマは、俗信と慣習である。ここでもまた、ロシアの現実と日本のそれとを比較することになる。学生は、ロシア人と日本人は似たような迷信を持っていると知り、そのことはいつも彼らを喜ばせる。例えば、頭を向けて寝ては不吉な方角というものがある。ロシアでは足をドアの方向に向けて寝てはいけないとされるが、日本では北枕が不吉だといわれる。しかし、理由は同じだ。死者がそう横たえられるからである。学生たちはこうした理由を説明しなくてはならない。学生の中には理由を正確には知らない者もいるので、そうすると、学生同士で説明し合い、それをまとめ、一つの結論に到達する。もちろん、ロシア語で、である。

このようにして、テーマに対する高い関心と

モティベーションのおかげで、学生たちはいつも積極的にディスカッションに参加し、それはチャットルームの目的を達成に近付けてくれる。

### 結論

チャットルームの目的、それを達成しようとしている手段や方法を検討してみると、この授業の主要な可能性を明らかにすることができます。

第一に、これは教科書がなく、ネイティブ・スピーカーがいることによって可能になる、より親密で自然な空間で行われる会話学習である。会話教育は、テーマ設定、学生の言語運用能力のレベル、ロシアに関する知識や既得の経験など、個別のアプローチへとつながる様々な方法によって成功に至る。学生はそこで、日常的な会話に参加すること、自分の考えをロシア語で表現することを学ぶ。

第二に、これは言語のハードルを取り除くことでもある。たいてい、学生はみな、外国語で話すことを恐れるという問題を抱えている。この抑圧状態を克服するために、私は学生との信頼関係を築くよう努め、対話を簡単な会話から始め、徐々にレベルと文章の難度を上げながら授業を進めている。

そして第三に、この授業のもっとも大きな労力を要する目的の一つが、文化間のハードルの克服である。このために私たちが行っていることは、ロシアと日本の文化を比較するディスカッションに参加すること、ロシアの伝統や生活習慣を分かりやすく紹介する様々なビデオや写真を見ること。また、学生に日本文化について、視覚に訴える資料を用意してきてもらうことも効果的である。これは同時に、モノローグ型の発話に習熟するためにも効果的である。

### 参考文献

1. Леонтьев А.А. Основы психолингвистики. М.: Смысл, 1997, С.287.
2. Габдулхаков Ф. Психолингвистика в обучении русскому языку. Учебное пособие по вопросам применения

- выводов и рекомендаций психолингвистики в методике обучения русскому языку как иностранному. Litres, 2017.
3. Walton D. *Media Argumentation: Dialectic, Persuasion and Rhetoric*, New York: Cambridge University Press, 2007.
  4. Marina A. Droga, "Linguocultural Component on the Lessons of Russian as Foreign Language," *The World of Russian Word*, No3, 2015.
  5. Харитонова С. В. Педагогическое содействие развитию культурологической компетенции студентов университета на занятиях по иностранному языку. Магнитогорск, 2006. С.149.
  6. Зимняя И. А. Лингвопсихология речевой деятельности, М. 2001.
  7. Изаренков Д. И. Обучение диалогической речи, М.: Русский язык, 1986.
  8. Цветкова М. Обучение устной речи (Из сборника «Общая методика обучения иностранным языкам»), М.: Русский язык, 1991.
  9. Верещагин Е.М., Костомаров В.Г. Язык и культура: Лингвострановедение в преподавании русского языка как иностранного. М., 1973.

### 注

- 1 会話における予習の有無に関して、P. B. グルヴィッチ（П.Б. Гурвич）が考えたように、事前準備がされていない場合の会話学習においては、一連の課題を案出することが重要である。時間内に準備ができなかつた会話には『即興』を、外的動機によって準備がされなかつた会話には『無理のない自然さ』と『創意』を指導すること、実際の正確さ、素早い反応、必要なテンポを身に着けさせることが重要である。
- 2 ある文化的・言語的な集団の表現は、ある種の共通の認識の総体を有する。その認識は、世界観（像）に反映され、他の文化・言語集団の世界観の表現とは異なる。A. A. レオンチエフ（А.А. Леонтьев）の見解によれば、言語において『ナショナルな世界観』は以下の形態に反映される。a) ステレオタイプの体系、b) 表象の体系、c) テクストの構造、d) 儀礼の形態、e) 低位言語と機能的文体、f) 言語活動における言語心理学的構造。

（本学非常勤講師）  
 （翻訳：浜由樹子・本研究所研究員）